

仏舍利三千粒と戒律

——鑑真から覚盛へ——

内藤 栄

はじめに

鎌倉時代に南都復興に携わった僧侶には、舍利信仰を推進した人物が少なくない。彼らは舍利を仏教の祖である釈迦への追慕や回帰の象徴と捉え、また舍利法や宝珠法に代表される舍利のマジカルなパワーを信奉した。唐招提寺の復興に当たった僧侶たちもその例に漏れず、舍利を勧進の旗頭に据えることもあった。その中であって、覚盛は舍利のもとでの授戒や布薩を行うなど、舍利に対して他の僧とは違うアプローチを示した。それは鑑真の授戒作法を復活させたものであり、鑑真による仏舍利請求の意義を覚盛が十分に把握していたことを意味する。覚盛は、舍利（釈迦）のもとで仏弟子になるという、真の意味での釈迦への回帰を実現したとも言える。舍利信仰に関して覚盛は重源や叡尊の陰に隠れた感があるが、鎌倉時代における舍利信仰に新風を吹き込んだ人物として再評価されるべきであろう。

この小稿では、鑑真が請求した仏舍利三千粒の由緒、請求の目的に稿を起し、唐招提寺の復興期における舍利礼拝空間の整備の歴史、そして覚盛の舍利信仰の特徴を考えることとしたい。さらに、覚盛の影響を受けた律僧の舍利信仰にも及びたいと思う。

一 仏舍利三千粒の由緒

鑑真は来日の際、三千粒の舍利を請来した。この舍利は、空海が唐から請来した仏舍利八十粒、二歳の聖徳太子の掌からこぼれ落ちたとされる舍利とともに、わが国においてもつとも信仰を集めた舍利であった。まつられた場所の名を取り、鑑真の舍利は「招提舍利」、空海の舍利は「東寺舍利」とも呼ばれ、聖徳太子の舍利は出現した際に太子が「南無仏」と唱えたと伝えられることから、「南無仏舍利」とも呼ばれる（本稿では鑑真請来の舍利を「仏舍利三千粒」と称することにする）。

これらの舎利の共通点は、宗派の祖師あるいは偉大な仏教者に由来すること、そして（南無仏舍利は当たらないが）海を渡って日本にもたらされたことがある。舎利の真偽に対して、インドから遠く離れた日本人はとりわけ関心が高かった。そのため、しばしば真偽を確認した逸話が伝わっており、それは日本人が初めて仏教に接した飛鳥時代まで遡る。『日本書紀』によれば、敏達天皇十三年（五八四）、蘇我馬子は自邸において法会を催したが、齋食において参列者の一人司馬達等は自身の食器の中に舍利を見つけ、馬子に献じた。馬子は真偽を確かめるため舍利を錠で打ったが砕けず、水に投げ入れると舍利は心の念ずるままに浮き沈みし、馬子は真骨と知って悔い信心を深めたという。この話は中国に粉本があり史実とは認め^①がたいが、重要な点は日本人がすでに飛鳥時代において、舎利の真偽にこだわる姿勢を有していたことである。したがって、舍利はわが国に海を越えてもたらされる、もしくは感得や湧出といった奇跡によって入手される必要があった。仏舍利三千粒はこの条件をクリアしていた。

舍利に限らず、海外からは最新の仏教がしばしばわが国に伝えられた。最新の仏教を伝えた人物には、鑑真や空海、最澄のように一つの宗派の祖師となった僧も少なくない。彼らが舍利を請来した場合、舍利は釈迦の遺骨としての意味に加え、釈迦が祖師に与えた印可としての意味も生じ、宗派にとって特別な重宝となる。次に述べるように、仏舍利三

千粒は鑑真が授戒に用いるために請来したとされるが、この舎利のもとで授戒することは釈迦より仏弟子として認可されることを意味している。

鑑真が舎利を請来した目的について、東野治之氏は重要な指摘をしている。東野氏は鑑真請来の『関中創立戒壇図経』に戒壇の内部に舎利を埋納するように説かれていること、また『七大寺巡礼私記』に東大寺の戒壇に聖武天皇の遺骨が埋納されているという、舎利安置を連想させる伝承が見えることから、戒律の普及に使用するために鑑真が大量の舎利を請来したと論じた⁽²⁾。今日、仏舎利三千粒は白瑠璃舍利壺に入れられ、舎利壺は金亀舎利塔(図1)の塔身内部に安置されている。白瑠璃舍利壺は奈良時代の日本では作ることもなかった吹きガラス製であり、鑑真が請来したことは疑いなくであろう。仏舎利三千粒がわが国に請来された後、多少は分与されたとしても、鑑真一行が東大寺から唐招提寺に移住した際に、仏舎利三千粒は舎利壺ごと唐招提寺に移されたと考えられる⁽³⁾。『唐大和上東征伝』は、唐招提寺の建立が戒律を学ぶために日本各地から訪れる者たちに習学の機会を与えたいと願う鑑真の意思に基づくと伝えられている⁽⁴⁾。唐招提寺に仏舎利三千粒が移されたのは、当寺を戒律道場とする目的があったからであろう。

承和二年(八三五)に住持の豊安が撰述した『招提寺建立縁起』によれば、平安時代初期において仏舎利三千粒は金堂の北東にあった経楼に安置されていた。経楼の建立は延暦年間(七八二〜八〇六)の後期から弘仁六年(八一五)頃に活躍した如宝によると推定され⁽⁵⁾、鑑真の時代に遡るものではない。鑑真の時代に仏舎利三千粒が寺内のどの堂宇に安置されていたかは不明である。奈良時代において仏舎利は塔に奉安されるのが基本であり、唐招提寺には弘仁元年(八一〇)に五重塔が建立されているから、ここに仏舎利が分納された可能性はある。しかし、仮に五重塔に奉籠されたとしても仏舎利三千粒の大部分は経楼に安置されたと考えてよい。おそらく授戒に使用するために舎利を建物内において保管し、随時運び出せる状態にしておく必要があったのであろう。

管見の限りでは、建物内において舎利をまつことはわが国ではこれが嚆矢である。平安時代の初頭、空海が仏舎利八十粒を東寺の宝蔵に置き、年に一度宮中に移して後七日御修法に用いたが、唐招提寺の例はそれを半世紀ほど遡る。

この保管方法が、平安時代後期以降、仏舍利三千粒に対する信仰に大きな変化をもたらした。この頃より仏舍利を本尊とする舍利法や、仏舍利を籠めた宝珠を本尊とする宝珠法が真言宗を中心に行われるようになり、皇族や貴族、武家の厚い支持を得た。⁶⁾これらの修法には法要の場にまつることが可能で、かつ靈験のある舍利が必要であり、その代表的な舍利が仏舍利三千粒と東寺の仏舍利八十粒であった。それらの舍利はしばしば分与、あるいは感得され、寺外にも信仰の裾野を広げることとなった。仏舍利三千粒に対する信仰が高まりを見せる中、唐招提寺は鎌倉復興を迎えることになる。

ところで、鑑真が仏舍利三千粒を入手した経緯については、これまであまり取り上げられることがなかったが、『延暦僧録』鑑真伝には次のような興味深い記事がある。

(前略) 於開元年中。有崇福寺主僧明演。來白云。今崇福寺破落。請大和上降臨於彼。講律受戒。修營功德。依請赴彼講大律等。修造大殿。(中略) 又欲構塔。其江都県令陳明府向洲衙。馬上忽見塔上霧氣結成九層。語典言。其塔本有七級。如今九層。細者乃是彩雲二重結於塔上。在後造塔三層。積上級九。八角高五十七丈。下三重基。々開四門八面。乃今羅睺法師檢校造塔亦畢。歎無舍利。時有梵僧。將舍利五千粒來。乃尽從請得。二千粒於塔上供養。便放光明。余三千粒隨身供養海若大風。(後略)

開元年中(七一三〜七四二)、鑑真は崇福寺の明演の請いを受け当寺において講律、授戒し、大殿を修造した。さらに八角七重塔を建立したが、塔に納める舍利がないことを歎いていたところ、舍利五千粒を携えた梵僧(インドもしくは西域の僧)が現れた。鑑真はそれを請い受け二千粒を塔上に安置し、三千粒は常に身から離さず供養した。残った舍利の数が三千粒であること、常に携帯したことがわが国への請来を暗示することから、これが仏舍利三千粒に当たる可能性は高いであろう。

中国の人々にとっても舍利の真偽は重要な関心事であった。中国の記録にはインドより舍利が請来されたという伝承や、インドのアショーカ王が建立した仏塔の遺構から舍利が発見されたという逸話を散見することができる。⁷⁾やはり、

舍利はインドよりもたらされる性格のものであった。仏舍利三千粒はその条件もクリアしている。

二 戒律復興の象徴としての仏舍利三千粒

今日、仏舍利三千粒は金龜舍利塔(図1)に安置され、経楼の旧位置に建つ舍利殿(鼓楼)の初層にまつられている。筆者は金龜舍利塔の造立年代について別稿で論じたことがある。ここでは、金龜舍利塔の様式が鎌倉時代前期から中期(十二世紀前半〜半ば)の特徴を示しており、造立は鼓楼が建立された仁治元年(一二四〇)頃と推定できると指摘した⁽⁸⁾。本章ではその推論に基づき、戒律復興の過程で仏舍利三千粒を荘嚴する空間が整い、金龜舍利塔が造立されたことを述べたい。

唐招提寺の復興は、平安時代後期に唐招提寺の住持となった実範(？〜一一四四)によつて着手された。『招提千歳伝記』実範伝には、実範の学問、唐招提寺に移住した経緯等が記されている。

律師実範京城人也。姓藤原氏。諫議大夫顕実第四子也。智度冲深神用高爽。少而出父母之家。投興福寺習学唯識。洞明底蘊。後入醍醐。從嚴覚公稟於密教。覚公先夢青龍出池。矯首水面。因召徒曰。今日必有求法人来。若等当扨壇場塵。以其日果範公至。覚公大悦。乃竭底授焉。(中略)因是詣春日社。期七昼夜。懺祈神託。期滿之夜夢自招提。以銅筧通淨水于中川。寤後以為是好相。明日至招提。見殿宇荒廢。緇徒寥落。一殘僧畊于田。師近問曰。太祖影堂何在。僧指其処。亦問寺中無比丘邪。僧曰。我雖不敏。曩曾聽四分戒本于戒光和尚。師大喜。遂就影堂乞為授受。尋歸中河大開講席。四來学徒雲臨海涌。初師在忍辱山。因採華至中川。見境物靈。乃奏官建伽藍。号曰根本成身院。後亦入招提。永久四年奏于鳳闕。修理伽藍。盛説律教。於斯律徒来聚。更復古春。(後略)

これによれば、実範は諫議大夫藤原顕実の第四子で、最初興福寺で唯識を学んだが、後に醍醐寺に移り嚴覚より密教

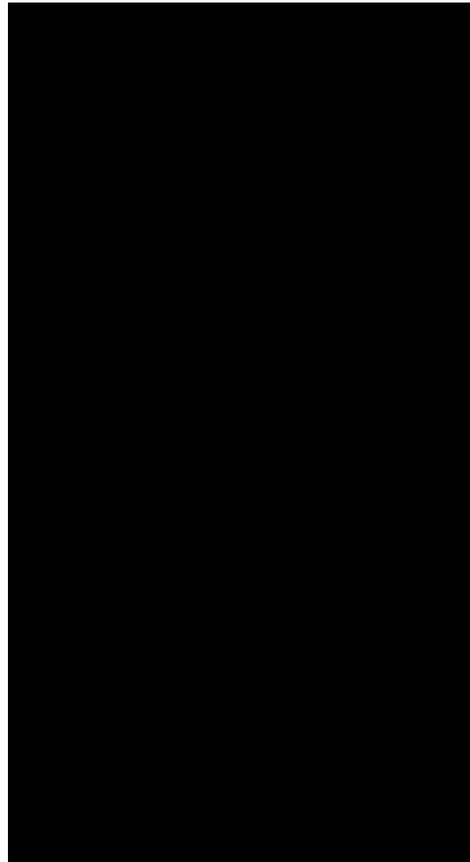


図1 金亀舍利塔

を学んだ。実範が春日社において七昼夜祈禱した際、夢に唐招提寺より中川に向け銅の笕を通って清らかな水が流れている様を見て、これを好相と感じ唐招提寺に向かった。しかし、唐招提寺は荒廃し一僧が田を耕すばかりであった。実範はその僧より戒律を学び、中川寺に戻ると衆僧を集めて講義を行った。実範は中川において伽藍を建て根本成身院と号したが、後に唐招提寺

に移住し、永久四年（一一一六）に当寺の伽藍の修理を上奏した。

実範が唐招提寺に移住した時期は不明であるが、唐招提寺における実範の活動の中で永久四年は重要な年であったらしい。関白藤原忠実の日記『殿暦』によれば、永久四年二月二十六日、忠実は自身が発願した春日社御塔に奉籠する舍利を、実範と推定される唐招提寺の別当僧から譲渡されている。同日条には次のように見える。

申剋許昭提寺別当僧相_(ツマ)具舍利 来、件舍利籠_ニ銅塔、々有_ニ同金蓮華、其下龜形_{以木造之}、塔内有_ニ瑠璃壺、其内有_ニ舍利。

これによれば、唐招提寺の別当僧が銅の舍利塔を持参したが、その塔の下には金蓮華と木製の亀形があり、塔の内部には舍利を入れた瑠璃壺が安置されていた。亀座が木製であることから、今日の金亀舍利塔とは別物であることは明らかだが、舍利壺を納めた塔を蓮台と亀座が支える形式が今日と変わらない点が目される。亀座にのる宝塔の意味については諸説あるが、『瑜祇経秘決』等に説かれる瑜祇塔を表したものと考えるのが妥当であろう。瑜祇塔という密教で用いられた塔婆形式を唐招提寺に導入した人物は、実範において他に考え難い。藤原忠実に舍利を譲渡したのと唐招提



図2 釈迦如来立像

寺の伽藍修理の上奏がともに永久四年であることは、関白であった忠実を仲介することで上奏が実現したことを暗示している。想像の域を出ないが、忠実が仏舎利三千粒の譲渡を受けたことをきっかけとして、伽藍復興の助力に動いたのではなからうか。とすれば、仏舎利三千粒は伽藍復興を推進させる上で象徴的な存在であったと言いうことができよう。

鎌倉時代になると仏舎利三千粒を礼拝する空間の整備と舍利供養の恒例行事化が、唐招提寺の十九代住持となった貞慶によって進められた。貞慶は建仁三年（一一〇三）、東室の南側を道場に改め、釈迦念仏会を始めた。今日の礼堂である。『釈迦念仏会願文并風誦文』のうちの貞慶が撰じた願文によれば、これは舍利に対し七昼夜釈迦如来の名号を不断に唱えるというものであった。同書において、貞慶は釈迦が身体の一部を日本という僻遠の地に留め置いたことに感謝し、舍利を拝することが奇跡であることを述べ、仏舎利の威光により釈迦の末法が保たれ、唐招提寺の伽藍が存続し、興法利生および平等利益といった功德を実現することを願っている。⁽⁹⁾貞慶は仏舎利を唐招提寺の信仰の核に据え、末法の世における衆生救済の根幹に置く発想を抱いていたことがうかがえる。

それより四十年ほどを経た仁治元年（一二四〇）、礼堂の西側に舍利殿（鼓樓）が建立された。この位置は経樓があった場所で、仏舎利三千粒は創建期以来の旧位置に安置されたことになる。舍利殿の建立は覚盛が唐招提寺に移住する四年前であり、第二十代住持の戒如の時代に行われたと考えられる。さらに、正嘉二年（一二五八）には、今日の礼堂本尊である釈迦如来立像（図2）が約一万人の僧俗男女の結縁によって造立された。この像は釈迦の生前

の姿を写したとされる清凉寺釈迦如来像の模刻である。この時は覚盛の示寂から九年を経ており、第二十二代住持の証の時代であったが、釈迦その人により近い釈迦如来像を必要とする機運が唐招提寺内にあったのである。おそらく、数年前に前代の住持である覚盛が戒律を復興したと関連すると思われる。すなわち、釈迦本人を前にして授戒を行うために本像が造立されたのであろう。

十三世紀初頭に貞慶が釈迦念仏会を開始してより半世紀以上に及ぶ歳月を経て、釈迦と舍利をまつる空間が整備された。先述のように、金亀舍利塔の様式は鎌倉時代前期から後期（十三世紀前半から半ば）の特徴を有しており、この時期における唐招提寺の伽藍整備において、金亀舍利塔が造立された可能性が最も高い時期は、仁治元年（一二四〇）における舍利殿の建立であろう。

さて、中世における唐招提寺の復興において、寺僧が仏舍利三千粒に何を求めていたかを示す資料がある。建長七年（一二五五）八月五日に唐招提寺から興福寺に提出された牒状（『春日大社文書』六〇五）を挙げよう。

招提寺謹触申

欲_下蒙_レ貴寺御許、暫奉_レ渡_レ御舍利於_二御寺近辺、勸_レ貴賤知_{（識カ）}修_{（造カ）}造堂塔僧院破壊_上状

右謹検_レ旧記、当寺者戒律之濫觴、舍利之靈砌也、道俗誰聊爾_{（哉カ）}、而草創年旧而仏閣竟傾、扶持人絶而僧院荒蕪、

中比海住山上人聊雖_レ被_レ加_二修治、其又季移而破壊如_レ元、朝夕見_レ之眼晩、寤寐思_レ之_{（機カ）}、以_二何方便修營、以_二

何計略支_レ之、抑当寺御舍利者、惣朝家之福田、別南都之重宝、不_レ可_二輒移転、雖_レ可_二畜寺而勧進、且有_二參詣之

煩、且無_二供養之儔歟、就中当世勧進充_二満国土、虚実難_レ弁、然者近奉_レ渡_レ御舍利於_二貴寺之辺、勸_二有縁知識令_二

供養、若有_二其施物者以_レ彼為_二用途、欲_二遂備_二修造之大功、若蒙_二御寺之許容者、寺門所望尤可_レ足矣、仍恐恐触

申之状如_レ件、

建長七年八月五日

貞慶修理後年月を経て元のように破損したので、仏舍利を興福寺の近辺に出して有縁の知識から施物を集めて修造の

大功を成し遂げたいと訴えている。建長七年は覚盛の後を継ぐ証玄が住持となった直後であり、証玄が最初に手がけた仕事であったかと想像される。礼堂の釈迦如来像が三年後に一万人の結縁によって造立されたことを考えれば、この折の勧進は大きな成功を取めたことが推測される。唐招提寺の寺僧たちの間には、仏舍利三千粒は知識たちに唐招提寺への帰依を訴えかけ、喜捨を集める力を有するという認識があり、伽藍再興の象徴的存在と考えられていたことがわかる。

三 覚盛の舍利信仰

覚盛が唐招提寺の住持を勤めたのは、寛元二年（一二四四）から示寂した建長元年（一二四九）の五年間であった。この時期、舍利殿はすでに建立され、仏舍利三千粒は現行の金亀舍利塔に納められていたと推定される。唐招提寺における仏舎利の礼拝設備はすでに整っており、釈迦念仏会も四十年以上継続され、比較的軌道に乗った時期に覚盛は住持に就いたと言えよう。

覚盛は寛元二年二月に唐招提寺に移住すると、四月十四日には僧侶四十六人を集め講堂において舍利会を行った。『招提千歳伝記』大悲菩薩伝は次のように記している。

（前略）夏四月十四日。聚衆侶四十六人。開舍利会於講堂。梵唄伶楽声震山林。次行四分布薩。請思円尊公而令説戒。翌日行梵網布薩。師昇座説戒布薩畢。率衆集于三聚坊。有金光一道從坊之西起。光中有神人。長一丈余冠裳偉麗。比丘教円進前問曰卿為誰邪。曰我是卅三天帝釈也。覚盛師發无上菩提心興已絶之律蔵。如法行布薩。故十六心真遣我随喜。又曰雖比丘僧既備未有三比丘尼。我先以爾為尼。言訖隱矣。時香氣鬱勃充満寺中。忽教円転男成女。一衆無不駭嘆。円即辞衆帰古郷。勉其姉某出家名曰信如。師更勸請十六心真於舍利殿中。即於如来真身舍利前授大比丘尼戒。（後略）

右によれば、覚盛は四十六人の僧侶を集めて講堂において舍利会を行い、その様子は「梵唄、伶楽の声は山林を震わ

す」と形容された。大勢の僧侶が参集し、楽舞が賑々しく演じられたことがうかがえる。ついで覚盛は四分布薩を行い、叡尊に依頼して説戒を行った。翌日、梵網布薩を行い、覚盛は座に着き説戒布薩を行った。この折、覚盛は衆僧を率いて三聚坊に集まったが、ここで金光の中に帝釈天が現れるという奇瑞に遭遇した。帝釈天は覚盛が戒律を復興し法のごとく布薩を行ったが故に、十六心真（十六羅漢）の命を受けこの場に來臨したことを伝えたが、一方で比丘尼の授戒がいまだに行われていないことを嘆き、一人の比丘を比丘尼に変えるという奇跡を起こした。そこで、覚盛は十六心真を舍利殿中に勧請し、舍利殿中において如来真身舍利の前で大比丘尼戒を受けた。

この記録は説話的要素が強いが、重要な点は覚盛が行った布薩や説戒が舍利会とセットで行われたこと、また覚盛が舍利殿において比丘尼の授戒を行ったことを伝えている点である。これは鑑真の時代の授戒作法を再現していると推測される。釈迦の前で授戒を行うという鑑真の教えを、覚盛が実践していたことを示している。

さて、唐招提寺には平安時代末から鎌倉時代にかけて用いられたと思われる法会諸道具が伝わっているが、そのうちの木製柄香炉（図3）は火炉裏面に「唐招提寺 舍利会香炉 五百之内」という墨書銘があることから、舍利会で用いられたことが明らかである。五百という数字は、右の記録に見える僧侶四十六人を大きく上回るおびただしい数の人々が参列したことを示している。また、法会諸道具には、建永二年（一一〇七）の銘を持つ羯鼓（図4）をはじめ、奚婁（図5）、鼓胴（図6）、楯、太鼓縁、鉦鼓縁などの楽舞や行道に用いられた品、道場を荘厳する幡を懸けるのに用いた龍頭を見ることができ。これらの道具は、舍利会をはじめとする唐招提寺における種々の法会に使われたと思われる。唐招提寺に伝わる法会諸道具は、「梵唄、伶楽の声は山林を震わす」と形容された寛元二年の舍利会の余韻を伝えている。

唐招提寺移住前における覚盛の舍利信仰についても見ておこう。『招提千歳伝記』大悲菩薩伝、および西大寺に伝わる覚盛願経の奥書によれば、寛元元年（一一四三）、覚盛は興福寺常喜院において『法華経』『四分戒本』『梵網経』『大乘百法門論』『般若心経』『一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼経』『唯識三十頌』を書写し、宝治元年（一一四七）七



図3 木製柄香炉

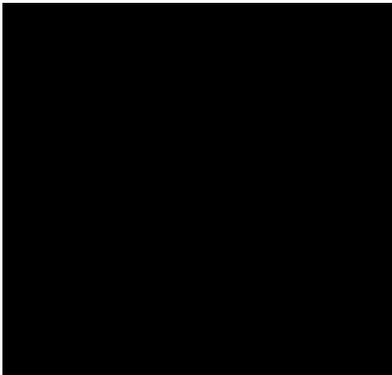


図5 奚婁



図4 羯鼓

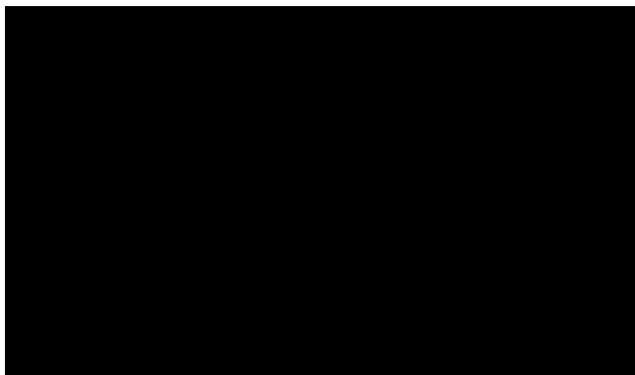


図6 鼓胴

月に塔を造立して經典を納め、唐招提寺応量坊に移して供養した。經典の選択に興福寺において唯識と戒律を学んだ覺盛の学問体系が反映している。右のうち舍利信仰に関わる經典は『一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經』である。同経によれば、この經典を書写して塔中に安置すれば、それは一切の如来の全身舍利（釈迦の舍利のように碎身せず、火化されない状態の全身の遺身）を安置する塔となり、一切如来の神力で護持され、一切の悪しきものに煩わされないとされる。同経は東大寺を再興した重源が文治元年（一一八五）に大仏の胎内に仏舍利八十粒とともに納入した例がある（『南無阿弥陀仏作善集』）ほか、同寺南大門の金剛力士像の胎内からも写本が発見されている。また、西大寺の叡尊は文永四年（一二六七）に般若寺の文殊菩薩像の胎内に舍利や様々な經典を奉納したが、その中に宝篋印陀羅尼一千遍を書写したものが含まれていた（『金剛仏子叡尊感身学正記』）。『一切如来心秘密全身舍利宝篋印陀羅尼經』は、鎌倉時代の南都復興における舍利信仰に大きな影響を与えた經典であり、覺盛の書写事業もその系譜に位置付けることができるだろう。換言すれば、唐招提寺移住前における覺盛の舍利信仰は、重源や叡尊らと変わらぬ立場にあり、戒律との接点はいまだ顕著とは言えない。

四 忍性の関東下向と舍利

鎌倉時代、南都復興に携わった僧侶には舍利信仰を鼓吹した人物が少なくないが、叡尊とその弟子である忍性は、覺盛と同じ律僧として舍利を授戒に用いた可能性がある点で特筆される。忍性は非人救済に献身的な活動を行ない、三十六歳で東国に移り住み、終生奈良に戻ることはなかった。ここでは叡尊が体験した法華寺舎利の湧出にまつわる奇跡を取り上げ、叡尊および忍性における授戒と舍利との関連について考えることとしたい。

『金剛仏子叡尊感身学正記』文永八年（一二七二）条に、叡尊が体験した仏舍利湧出譚が記録されている。それは次のような内容である。同年二月、叡尊は西大寺中の仏舍利、および法華寺で湧出した仏舍利二千粒を供養した。結願後、

法華寺舍利を壇から下して収納したが、香箱の蓋の上に舍利二粒が現れた。舎利の出現はその後も続き、最終的に五千粒を数えた。叡尊はこの奇瑞は法華寺の本願である光明皇后の意思によるものと考えた。叡尊は三千粒を西大寺分として拝領し、うち一千粒を忍性が所望するので与え、百粒を諸人に分け、残りは西大寺の鉄宝塔に安置した。

『法華寺舍利縁起』によれば、法華寺湧出の仏舍利は次のような由緒を有していた。法華寺の尼僧空如は唐招提寺に参籠した折、自身が感得した東寺舍利一粒の真偽を確認するため鎚で打ったところ、五打目で碎け光明を発した。法華寺の尼僧修阿弥陀仏はそれを一粒もらい受けたが、それはやがて二粒に増えた。修阿弥陀仏の息子行窮は年来舎利を求めていたが、母の舎利が分散したことを知り、一粒を請い受けた。行窮所持の舎利はやがて数百粒にまで分散した。建長三年（一二五二）に叡尊が法華寺で律を講じた際、行窮は舎利を持参したが、その舎利は叡尊と尼僧の目前で無数に分散した。行窮は全て拾い集めて帰ったが、講義を続けていた叡尊は書物の上や机の上に出現した舎利を発見し、壺に入れて法華寺に安置した。舎利は日々倍増し、文永七年（一二七〇）正月には二千七十三粒を数えたという。

以上をまとめれば、この仏舍利は空海ゆかりの東寺舍利一粒から分散したもので、唐招提寺において奇跡を起こしており、叡尊は光明皇后の意思で分散を起こしたと考えた。叡尊は三千粒を西大寺分として請い受け、そのうちの百粒を諸人に分け与え、忍性には一千粒という破格に多い数の舎利を与えた。おそらく忍性は自身の念持用としてではなく、確固たる目的、具体的に言えば造塔、造像、舎利法、授戒などに使用する意思があったのではなからうか。『性公大徳譜』によれば、忍性は建治元年（一二七五）、焼失した極楽寺の塔婆を再建し、弘安元年（一二七八）、筑波の椎尾山頂に宝塔を建立した。同書によれば忍性は生涯において二十基の塔婆を建立し、二十五基の塔を供養した。これらの塔全てに舎利が安置されたとは限らないが、舎利をまつた塔婆も少なからずあったと推定される。また、叡尊の周辺では西大寺の釈迦如来立像をはじめ、胎内に舎利を安置した仏像を多く見ることができ、茨城県土浦市宍塚の般若寺の縁起によれば、同寺の阿弥陀三尊像は忍性の造立になり、三尊には各々舎利が安置されていたという。¹⁰ 忍性も舎利を安置した仏像をしばしば造立した可能性がある。

また、授戒に舍利が不可欠なことは先述の通りである。建長四年（一二五二）、三十六歳の忍性は関東に下向したが、この時の決意を忍性は同学に「東州いまだ人あらず、我いまだ得ざるといえども頗る先度を欲するのみ。これ我輩の志なり。すなわち常州にいき清涼院にすまいし、律学を闢かん」（『元亨釈書』卷第十三、原漢文）と語っている。すなわち、伝戒の人がいない関東に下向し、戒律を広めることが目的であった。実際、二年後の建長六年（一二五四）、忍性は初めて具足戒を授け、和上となった（『性公大徳譜』）。授戒には仏舍利が必要だが、忍性は師叡尊が大量の仏舍利を所持していることを知り、その一部を請い受けたであろう。一千粒というおびただしい数の舍利を携えて伝戒のために東国に移り住み、再び郷里に戻らなかつた姿は、仏舍利三千粒を携え東海の日本に渡り、生涯日本で授戒を行った鑑真を彷彿させる。忍性は最晩年の永仁六年（二二九八）に東征伝絵巻三巻を作成し、唐招提寺に奉納したことが示すように、鑑真を追慕する想いは人一倍強かつた。忍性は行基や鑑真、あるいは叡尊など偉大な先学に自身の行動を重ねる傾向があり、関東下向は鑑真の東征になぞらえた行いであつたと推定される。しかも、拝領した舍利が空海、唐招提寺、叡尊にゆかりがあることは、忍性をして東国への伝戒の使命感をより強く自覚させたことであろう。

また、唐招提寺の第二十九代住持覚恵も舍利が大量に増える体験をしている。『招提千歳伝記』覚恵伝によれば、元徳三年（一一三二）三月、覚恵は越前に至り新善光寺を建立した。覚恵はこの寺に舍利がないことを嘆き、唐招提寺の仏舍利三千粒から六粒を請い受け、新善光寺に安置した。六年を過ぎた時、六千粒が増えており、覚恵はますます信心を深めたという。覚恵伝は新善光寺建立の目的を記していないが、唐招提寺の住持が伝戒を行わなかつたとは考え難く、やはり授戒のために地方に舍利をまつたのであろう。

おわりに

以上、仏舍利三千粒に対する信仰について検討し、覚盛がこの舍利を用いて授戒を行ったこと、これは鑑真がもたら

した授戒作法を復活させたものであることを論じた。さらに、覺盛の信仰は同時代の律僧にも広がり、忍性のように大量の舎利を携えて東国に伝戒に赴く僧も登場した。その根底には鑑真の東征を模範とし、生涯故郷に戻らない強い決意があったことを指摘した。

本稿の主要なテーマは、仏舎利三千粒の存在が戒律復興を推進させたことである。極端な言い方をすれば、唐招提寺は仏舎利三千粒を守り伝えたからこそ、鎌倉時代に戒律復興を実現することができたと言えよう。これまで鎌倉時代の南都復興において舎利信仰が大きな役割を果たしたことが指摘されてきた。その理由を釈迦への回帰、舍利法や宝珠法の隆盛に求める傾向が強いが、戒律と舎利との関連にも注意を向ける必要があるだろう。この時期の舎利信仰の立役者の多くが律僧であることも、そのことを雄弁に物語っている。

註

(1) 中国における舎利の真偽を確認する逸話として、舎利を水に浸ける方法と鎚で打つ方法がある。前者には魏の明帝の時代(二二七～二三九)に外国の沙門が明帝の前で水を張った盤の中に舎利を入れたところ、光を放ったという話(『冊府元龜』卷五十一「帝王部崇釈氏一」、晋のはじめ(三世紀) 還俗しようとする僧に父が舎利を水に投げ入れ、五色の光を発するという奇跡を起こしたという話(『法苑珠林』卷四十) などがある。後者には呉の赤鳥四年(二四二)、孫権が外国僧の感得した舎利を壊せなかったという話(同)、呉の孫皓(治世二六四～二八〇)が舎利を鎚で打ったが壊れなかったという話(同) などがある。

(2) 東野治之「鑑真和上と東大寺戒壇院——授戒と舎利の関係をめぐって——」(『戒律文化』三号、戒律文化研究会、二〇〇五年、『大和古寺の研究』、塙書房、二〇一一年所収)。

(3) 「諸寺建立次第」(建久六年～建保四年(一一九五～一二一六))には、仏舎利三千粒について「僧坊東有_レ藏、納_二和尚所_レ持和利_(舎利)也、奉_レ分_二国王大臣等_一残三千粒也」と見える。

(4) 『唐大和上東征伝』
 (前略) 時有_二四方来学_一戒律者。縁_レ無_二供養_一多有_二退還_一。此事漏_二聞天聽_一。仍以_二宝字元年丁酉十一月廿三日_一。勅施_二備前国水田一百町_一。大和尚以_二此田_一欲_レ立_二伽藍_一。時有_二勅旨_一施_二大和尚園地一区_一。是故_二一品新田部親王之旧宅_一。普照、思託請_二大和尚以_二此地_一為_二伽藍_一。長伝_二四分律藏_一、法励_二四分律疏_一、鎮道場_二飭宗義記_一、宣律師鈔、以_二持戒之力_一保_二護国家_一。大和尚言大好。即宝

字三年八月一日私立唐律招提。(後略)

- (5) 内藤栄「創建期唐招提寺の造営経過」(『藝叢』第三号、筑波大学芸術学系芸術学研究室、一九八六年)。
- (6) 舍利法、宝珠法については、内藤栄『舍利莊嚴美術の研究』(青史出版、二〇一〇年)参照。
- (7) 中国におけるアショーク王建立伝承を有する主な塔に、白馬寺東の塔(『仏祖統記』卷五十三)、長干寺塔(『高僧伝』卷十三)、法門寺塔(『唐大薦福寺故寺主翻訳大徳和尚伝』)がある。
- (8) 内藤栄「唐招提寺金亀舍利塔の成立」(百橋明穂先生退職記念献呈論文集『美術史歴参』、中央公論美術出版、二〇一三年)。
- (9) 「釈迦念仏会願文并風誦文」のうち願文
 (前略) 就中至遺身舍利。帰依殊重。正分在世之昔身。現留無漏之真体辺土。得之希而甚希。肉眼見之。奇而猶恠。機縁之深。恩徳之重。大哉。至哉。(中略) 殊発大誓願。永守此仏舍利。増威光。以真実之法味。動本誓。以諸衆之祈念。願報積尊一万年之末法。伽藍之覺不傾。又及増劫六万歳之時節。駄都之光無沈。以施興法利生之大益。以満上求下化之深願。乃至結界。平等利益矣。
- (10) 「諸州神仏縁起」(江戸時代、国立国会図書館蔵)による。本書については、般若寺の内山賢昇住職よりご教示いただいた。